

佐野先生のこと

浅山佳朗

私が佐野先生に直接おあいしたのは、神奈川県大学の教員採用にあたっての面接のときがはじめてであった。先生は私の提出した論文にふれられて、参考文献にかんするいくつかの質問をなさり、さらに面接を終了するにあたって、帰途のバスの便について親切におしえてくださった。私は、来るときに、白楽の駅から地図をたよりにあるいてきていたので、ありがたく先生のご指示にしたがってかえったのであるが、かえりみち「ああ、これがあの佐野先生なのだ」とくりかえし思いおこされた。

私は、大学および大学院のときに近世の日本漢学を専攻していた。卒業論文のころは、まだ日本漢学に関する資料の出版がすすんでおらず、基本的な資料を、各大学図書館や内閣文庫、都立図書館などから借りだして、そつとコピーをとったりしなければならなかった。それが、修士課程にすすんだ春に、先生の監修された『東瀛詩選』が汲古書院から出版され、つづいてやはり先生の監修による『詩華集日本漢詩』と『詩集日本漢詩』のシリーズが出版されて、研究生生活をはじめたばかりの私たちにとっては、何よりもありがたいものとなった。それが佐野先生の

お名前を存じあげる最初だった。

私は、国文学科の学生ではあったが、ふるい上代の文学についてあまりまじめに学習しなかった。この汲古書院の一連の初期の『万葉集』や『風土記』にかんする研究については不勉強にも存じあげなかった。この汲古書院の一連の著作で、先生の堅実で該博なご研究に接することとなった。日本漢学の研究者は当時も現在もそれほどおおくなく、また文献にかんする基礎的な研究も充実していなかったなかで、ここにこのようなすぐれたご研究をなさっているかたがいらっしやるのだということを知り、すぐれて勇気づけられた。

先生のご研究についてかたる資格など私にはないが、それでも私などの目から見ても、先生のご研究は、いわば足が地についた研究といえるもので、書誌学的な調査をはじめとする事実を丹念に追求される姿勢には敬服の念をいなくとしきりであり、大学院で近世日本漢文の言語学的な分析をはじめていた私にとって、書誌など基礎データにかんしては、『詩集日本漢詩』のシリーズに先生がおかきになったご研究を参考にさせていただいた。

そのようにして、私が勝手に一方的に先生のご研究にふれさせていたたいたのであるが、不思議なご縁でも神奈川大学につとめる機会をえることになり、しかも面接の際に先生にお目にかかることができたというわけである。

その後も、私は、佐野先生にさまざまに指導いただくことになった。とくに私と同年に神奈川大学へ中国語特任教員として蘇州から来ていた厳明教授と、日本漢詩にかんする共同研究をすすめていたのであるが、佐野先生はその研究にたいへん興味をしめされ、当時先生が編集委員のおひとりとして関係されていた「日本漢詩人選集」のシリーズのひとつに、私たちをご推薦くださった。先生のおかげで私たちのささやかな研究を外にむけて発すること

が可能になったわけであり、感謝の念にたえない。

また、先生のことをおもいだすとき、わすれられないのが古書店街につれて行っていただいたことである。学生のはなしをきいても、佐野先生といってよく話題になるのが、どこそこの博物館につれて行っていただいた、どこそこの図書館を案内していただいた、といったことであるが、私もその例にもれず、神田の古書店街にいくどもつれて行っていただいた。神保町につくと、まず地下鉄をあがった山本書店に荷物をおあずけになる。そこで本をご覧になりながらお茶をいただいて、駿河台下にむかって古書センター、一誠堂、八木書店を中心にしてあれこれまわり、うなぎ店やそば店で食事というのがコースだった。その途中、本のおはなしをうかがうのはとてもたのしい経験だった。

それももうできないが、天の古書店街で、いまはもううしなわれてしまった本にかこまれて微笑まれているのではないだろうかとかんがえて、先生をうしなったかなしみをまぎらすしかない。

佐野先生、ほんとうにありがとうございました。